

農業技術

リズム

ビワ灰斑病は、葉に円形の斑点を形成し多発すると落葉する他、病原菌は成熟期の果実を腐敗させる原因にもなるため、栽培上重要な病害とされています。

一般的に病害が発生しにくい栽培環境づくりの一として、健全な樹体づくりがあります。ビワに対する施肥量と灰斑病発生との関連は不明だったため、この点について調査を行いました。

試験は、県施肥基準の窒素量を施肥する「基準区」（供試樹が5年生樹、9・5⁺ロ/10⁺）の他、その倍量を施肥する「倍量区」、半量を施肥する「半量区」

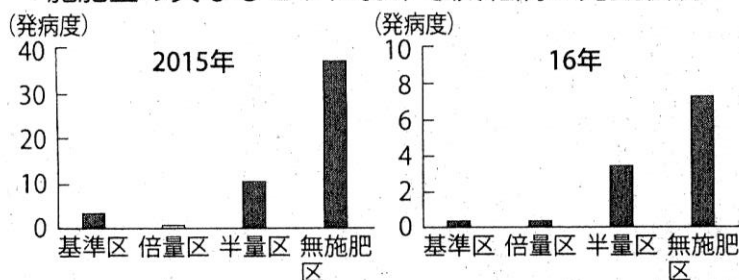
区「および」無施肥区」の計4区を設け、それぞれの新葉に同量の灰斑病菌を接種し、その後の経過を2年間観察しました。結果、「半量区」および「無施肥区」は、「基準区」と同等の発生度

ビワ灰斑病と施肥量の関係

無施用で発病度増加 適正に施し環境整備

施肥区」では、「基準区」に比べ、灰斑病の発生が明らかに増加しました。また「倍量区」で

施肥量の異なるビワにおける灰斑病の発生状況



※発病度：発病の程度を数値化したもの。数値が大きいほど発病が多いことを示す

（果樹・茶研究部門 内川敬介）